

あとがき

下巻のあとがきである。謝辞は上巻のあとがきで記したため、ここでは割愛するが、本巻も多くの人びとのおかげで刊行の運びとなった。あらためて心より感謝を申し上げる。

上巻のあとがきで予告したとおり、ここでは本書の成り立ちについて簡単に述べておきたい。遡ること二十数年前、筆者の学部卒業論文はヘアを主題とするものであった。以来、最初の学術論文もヘアとウィリアムズに関するものであり、博士論文もヘアについて書き、最初に出版した書籍もそれを改稿したものであった。その後、さすがにヘア一辺倒から離れるべきだと感じ、十年ほど前からヘアと同時代のアンスコム、マードック、フットについて真剣に研究を始めた。後にして思えば、博士論文を書いた段階では、フットらのヘア批判の重要性などはまるで理解できていなかった。この段に至ってようやく、彼女らが何を言いたかったのかが臆げに掴めてきた。それによって、ヘアのこともまた別の角度から見られるようになり、新しい面白さが見えてきたのだった。

そうした自分自身の経験から、この時代のメタ倫理学に関心がある人びとが、少し違った角度からそれらを見る一つの契機を提供できればと考え、あるいはそもそもそれらをまったく知らない人にも少しでも関心をもってもらえればと考え、本書の執筆を開始した。当初は、ヘア、フット、アンスコム、マードックという一九一九年生まれ（フッ

トは一九二〇年）の四人についてのみ書くつもりであった。しかし、構想を進める中で、彼・彼女らをそこに立たせたものが何であったのか、そして彼・彼女らが遺したものがその後どうなったのか、という点も知ってもらいたいと思いはじめ、結果として、ムーアからパーフィットまで、という構成になった。当然ながら字数は天井知らずに増え、分厚い一冊とするか、二分冊とするか、ということ編集担当の土井美智子さんの頭を大いに悩ませてしまうことになった。本当に申し訳ないと思うと同時に、最後まで根気強く伴走してくださったことに、深く感謝している。

通史のような形式での執筆は今回が初めてで、膨大な情報の取捨選択には、これまでにない苦労がともなった。自叙伝やインタビューなどで語られるエピソードは興味深いが、それなりに書き手・語り手・聞き手のバイアスがかかったものもあり、どれを採用するか悩むところもあった。さらに、尊敬する研究者の先輩があるときに「あたかもこれが唯一の正史であるかのような哲学史を書いて人びとの見方を固定してしまうことには反対だ」と語っていたため、それに対する応答（言い訳）も考えながら執筆を進めるはめにもなった。

結果として、筆者の中で落ち着いたのは、これぞという哲学史を書くというよりも、上述のように、メタ倫理学の発展史の中で、自分が面白いと感じている一側面を切り取ると割り切って紹介するという方針であった。そもそもメタ倫理学の完璧な歴史を書くためには、オックスフォードに注目するだけでは足りず、その他のイギリス各地はもちろん、アメリカの議論もしっかりと記述せねばならないのは明らかである。注での説明に留めざるをえなかった哲学者たちもそれぞれに欠かせない役割を担っている。特に、ウィトゲンシュタインはヘア世代を中心に本書の登場メンバーの多くに絶大な影響を与えているため、本編で取り上げることがかなり悩んだが、結局、力量の限界から断念した。また、伝記的な部分についてはなかなか一次資料にあたる機会がなく（ボドリアン図書館の深部には彼らの残したメモや未刊行の原稿のアーカイブが眠っているという）、多くがそれらを利用して書かれた伝記や評伝、会員の没後に英国学士院が発行する弔文、晩年の回想などに頼らざるをえなかった。哲学史を専門とする研究者諸氏から見れば、

不満も多々あるうかと思うが、こうした点については今後の課題とさせていただきたい。

ただ、二十世紀が終わってから四半世紀が過ぎ、当時を振り返る文献の充実ぶりには本当に目を見張るものがある。個人の伝記・評伝では先頃邦訳が出版されたバーフィットのものをはじめとして、オースティン、マードックのものが、ムーア、エア、ヘアは自叙伝が残っている。本書では名前だけの登場となったが、ケインズ、バーリン、メアリー・ウォーノックやケニーらの評伝・自叙伝も当時の雰囲気をよく伝えてくれている。複数人を扱ったものとしては、アンスコム、フット、マードックにミッジリーを加えたオックスフォード・カルテットを扱った二冊（『オックスフォードの女性哲学者たち』、*The Women are Up To Something*）が出色の作品である。これらの充実した文献がなければ本書は単に学説を羅列するだけのものになっていた可能性も否めない（もちろん、そうした著作も重要である。哲学者たちの生きた背景を知ることの意義についてはマックール&ワイズマン『オックスフォードの女性哲学者たち』（木下頌子訳、青土社、二〇二五年）の解説で述べたので、そちらも参照していただきたい）。

また、本書の執筆にあたっては、日本で先人たちが連綿と紡いできたメタ倫理学研究の営みにも触れることになった。一九五〇年代後半にはすでに、「メタ倫理学」という言葉がいくつかの論文で使われており、プリチャードやロスの論文が含まれたホスパース編の『現代英米の倫理学』の翻訳も始まっている。その後も、決して倫理学のメジャー分野とは言えないものの、大陸系倫理学や規範倫理学研究のかげに隠れながら、その探究の系譜は脈々と受け継がれてきた。本書で取り上げた哲学者たちの主要著作もそのほとんどが翻訳されている。こうした先人たちの営みに最大限の敬意を表するとともに、本書が、彼・彼女らの積み上げてきてくれたものを次の世代へと受け渡していく一助となることを、心から祈るばかりである。

最後に、なぜ二十世紀のオックスフォードなのか。これは本書の草稿を読んでもらった際、研究者仲間の一人から問われたこともある。メタ倫理学の最新の理論を知りたいのであれば、地域を問わず二十一世紀の文献を読むべきであるし、哲学的に定評のあるアイデアを得たいのであれば、古代以来の古典に目を向けるべきであろう。なぜ今

更、この時代、この場所に目をやる必要があるのか。研究資料の充実、現代の理論との接続、未解決の問題、と様々なそれらしい理由を挙げることはできるだろう。特に、第二次大戦や社会構造の大きな変革を経験したオックスフォードの道徳哲学は、単に理論上の関心を刺激することを超えて、現代の様々な深刻な倫理的・社会的課題を考えるための示唆を与えてくれる。しかし、結局のところ、私にとって最後に残るものはどうしても、この時代、この場所、そこで生きた哲学者たち、そして彼・彼女らの議論が面白いから、ということに尽きてしまう。八百年以上もの間、学問の営みを見守ってきた街。そこで真理の探究に人生をかけた多くの研究者たち。彼・彼女らが倫理というただ一つの主題をめぐるって繰り返してきた数多の議論。それゆえに、上巻のあとがきと同じ言葉をもって、下巻のあとがきも終えることとしたい。本書を通じて、皆さんに少しでもオックスフォードの倫理学を面白いと思ってもらえたなら、それに優る喜びはない。

二〇二五年七月

佐藤岳詩